

◆そうごう薬局 新見店 川本様より

- ・薬局として入退院の把握ができていない
- ・病院から入院時に問い合わせ(他院の薬の情報など)を受けている
- ・切れ目のない医療を提供するためにも、入退院時にケアマネジャーからの情報を求める

◆A グループ

- ・コロナ禍の病院において入退院で困ったことは、発熱があった方、流行地の人と接触があった方など、入院の受け入れが出来ない事があり心苦しい。グループ内にはそれについて困った経験のある事業所はなかった
- ・連携の面で、地域包括支援センターが良く動いてくれる。
- ・各病院に地域連携室が設置されており、コロナ禍で面談ができない状態であるが、情報提供をいただき大変助かっている。
- ・リハビリ面では、入院時・退院前訪問により退院後のサービスに反映できるので、コロナ禍で難しい時期であるが、していかなければならないと思っている。
- ・(病院から)透析されている方や認知症の方の対応がなかなかできないが、ケアマネジャーの方でもたひょうの丘ホスピタルなどに繋ぐなどして対応している。

・ **Question** (薬剤師：川本様へ)

入院時に薬局に連絡したくても、どこの薬局がかかりつけかわからない。どうすればよいですか？

Answer (川本様より)

かかりつけ薬局は、まずは患者本人に聞く。お薬手帳に名詞が貼ってあることがあり、お薬手帳のシールには必ず薬局名や担当者名が印字してある。また、かかりつけ薬局が決まっていない人に、かかりつけ薬局を選んでいただくように声かけしてください。

◆B グループ

- ・入退院時の連携でケアマネジャー側からは困ることはない。加算などのメリットもあるので、これからも早めに情報提供をしていきたい。
- ・入院時の情報提供を薬剤師にもしていかなければならない。「お気軽にお声かけください」と薬剤師さんも言ってくれているので、薬局を上手に使えるといいと考える。
- ・MSW は、リハビリからの情報を伝えていくよう努めている。入院時に訪問し家屋調査に行っているがセラピストだけである。今後はケアマネジャーにも声かけし、同行してもらいたい。ケアマネジャーからは「その時は、声をかけてください」
- ・コロナ禍をみんなで協力して乗り越えていこう

質疑応答

・ **Question**(薬剤師へ)

入院時に薬局が病院へ訪問することはあるか？

・ **Answer**(角谷様)

情報提供をしたくても、入院したことを知らないのでできない状況。

※今後はお薬手帳やおくすり連絡帳を確認して、入退院時にはかかりつけ薬局に連絡するように努めていく。

◆C グループ

- ・困っていること。コロナ禍で面会ができない。良くなっていることを伝えても理解してもらえず、入院の継続を望む方もいる。
- ・現在、退院前訪問を休止しているため、情報共有に工夫が必要。リモート利用や動画の録画などで対応しており、ケアマネジャーにも協力してもらっている。
- ・面会ができないので、患者さん自身のモチベーションが下がり、回復が遅れ、不穏状態になったり食事が低下したりすることで、長期化するケースが増えている。
- ・退院前の介護指導が十分にできないため、不安もある。ケアマネジャーが退院後のプランを作成する際にも、「帰って見ないとわからない」という状態で、イメージしながら暫定プランを立て、帰ってみてから修正することが多くなっている。このような現状だからこそ、ケアマネジャーに細かく分かり易く情報を伝えていきたい。
- ・オンライン診療が普及すれば、新見地域では助かるだろうが、高齢者が使いこなせるかが課題。
- ・県外から帰省した家族が病院に付き添うことについては、感染対策を取ることで対応している(新見中央病院)。

その他意見等

- ・整形外科的には入院時と退院時の ADL が違うので、家屋の構造を知り、家に帰ってからの生活を考えながらリハビリをする必要がある。セラピストと MSW の連携を密に図りたい。
- ・コロナ禍により、高齢者が引きこもりがちになっている。高齢者世帯で、流行地等から家族が帰省するとサービスがストップしてしまう。そのため、家族との語らいの時間も無くなってしまう。また、デイサービスがストップすることで認知症の進行が見られたり、下肢が弱ってしまったりする人もいる。対応として、サロンなど地域での社会資源の紹介をしたり、自宅でできる運動を勧めたりしている。